

トピック

B

子どもの運動・スポーツと家族

桜美林大学 健康福祉学群 准教授 澤井 和彦

子どもの運動・スポーツ活動にとって家族が重要な役割を担っているという指摘は、これまで多くの先行研究によってなされている(加賀1995、吉田ら2004、吉田2009)。吉田ら(2004)は、4~6歳児、約9,000名を対象とした全国調査の結果から「家族と子どもと一緒に運動あそびをする頻度が高い」「きょうだい数が多い」「3世代以上の家族」「親がスポーツ選手にさせたいと思っている」という子どもほど運動能力が高いという結果を示している。また、最近では小学5年生と中学2年生を対象とした文部科学省による「平成27(2015)年度全国体力・運動能力、運動習慣等調査」(文部科学省スポーツ庁、2015)において、「家の人から運動やスポーツを積極的に勧められたことがある」「家の人といっしょに運動やスポーツをしている」「家の人とスポーツをみる」「家の人と一緒に運動やスポーツについて話をする」という子どもほど、体力・運動能力が高いといった結果が示されている。

しかし、以上の調査は変数ごとの単純比較が多く、変数間の相互関係は考慮されていない。そこで本稿では、家族が子どもの運動・スポーツ実施に与える影響について、いくつかの要因を考慮するロジスティック回帰分析を用いて検討した。

B-1 子どもの運動・スポーツ実施に関連する要素

本稿では、子どもを取り巻く環境が異なる状況を考慮し「4~9歳のスポーツライフデータ2015」のデータを未就学児と小学生(小学1~4年)の2群に分類し、それぞれに分析を行った。本調査では体力や運動能力は測定していないため、本稿では「運動・スポーツ、運動あそびの実施頻度」(以下、「運動・スポーツ実施頻度」と、「運動・スポーツ、運動あそびの好き嫌い」(以下、「運動・スポーツの好き嫌い」)を従属変数として用いた。運動・スポーツ実施頻度は、過去1年間によく行った運動・スポーツ、運動あそび上位5種目(調査票問3)の回答から、すべての実施種目の頻度を合計し、「0回~週3回未満」を「運動・スポーツ実施低頻度群=0」、「週3回以上」を「運動・スポーツ実施高頻度群=1」としたダミー変数を用いた。また「運動・スポーツの好き嫌い」は、「好き」と「どちらかという好き」を合わせた回答を1、「どちらかという嫌い」と「嫌い」を合わせた回答を0としたダミー変数を用いた。

独立変数は、性別(男=1、女=0)、家族構成(三世帯

以上家族=1、二世帯家族=0)、母子家庭(母子家庭=1、両親家庭+父子家庭=0)、世帯収入(年収600万円以上=1、年収600万円未満=0)、父親および母親の運動・スポーツ実施状況(している:よくしている+時々している=1、していない:ほとんどしていない+していない=0)、保護者の運動・スポーツ活動歴(父親または母親が中学・高校の両方で運動部員だった=1、および父親または母親が小・中・高校で民間・地域のスポーツクラブに参加していた=1)、スポーツ系の習いごと実施の有無、家族での運動・スポーツ(行う:よくしている+時々している=1、行わない:ほとんどしていない+まったくしていない=0)、家族は子どものスポーツ活動をみにいく(みにいく:よくいく+時々いく=1、みにいかない:ほとんどいかない+全くいかない=0)を用いた。残念ながら、本調査では吉田ら(2004)の調査にあった「きょうだい数」はたずねていない。また、今回は家族に関する社会的変数に限定して分析を行ったため、保護者の意識や志向などの社会心理的な項目は含めていない。

B-2 子どもの運動・スポーツ実施頻度と家族

表B-1に子どもの運動・スポーツ実施頻度とそれに関連する項目とのクロス集計結果を示した。未就学児では、運動・スポーツ実施頻度はほとんどの変数との間に有意な関係はみられず、唯一、家族と一緒に運動・スポーツを行っている子どもは実施頻度が高いという傾向が確認さ

れた。一方、小学生では、母親が運動・スポーツを実施している、スポーツ系の習いごとをしている、家族と一緒に運動・スポーツを行う、家族が子どものスポーツ活動をみにいくといった項目との間に、それぞれ有意な正の相関がみられた。

【表B-1】子どもの運動・スポーツ実施頻度と家族に関連する項目とのクロス集計

		未就学児			Pearsonの カイ2乗 漸近有意 確率(両側)	小学生			Pearsonの カイ2乗 漸近有意 確率(両側)
		n	運動・スポーツ 非実施群	運動・スポーツ 実施群		n	運動・スポーツ 非実施群	運動・スポーツ 実施群	
	全体	289 100%	73 25.3%	216 74.7%		831 100%	147 17.7%	684 82.3%	
性別	男子	151	24.5%	75.5%	.757	422	15.2%	84.8%	.053
	女子	138	26.1%	73.9%		409	20.3%	79.7%	
家族構成	二世帯家族	235	25.1%	74.9%	.843	672	17.1%	82.9%	.352
	三世帯家族	53	26.4%	73.6%		158	20.3%	79.7%	
母子家庭	母子家庭	22	22.7%	77.3%	.769	59	20.3%	79.7%	.549
	その他	266	25.6%	74.4%		759	17.3%	82.7%	
世帯収入	年収600万円以上	59	23.7%	76.3%	.946	179	12.8%	87.2%	.367
	年収600万円未満	95	24.2%	75.8%		283	15.9%	84.1%	
父親の運動・スポーツ 実施状況	運動・スポーツをしている	115	21.7%	78.3%	.251	337	16.9%	83.1%	.610
	運動・スポーツをしていない	173	27.7%	72.3%		492	18.3%	81.7%	
母親の運動・スポーツ 実施状況	運動・スポーツをしている	70	27.1%	72.9%	.691	227	13.2%	86.8%	.036
	運動・スポーツをしていない	218	24.8%	75.2%		601	19.5%	80.5%	
保護者の 運動・スポーツ 活動歴	父親または母親が中学・高校の 両方で運動部活動経験あり	115	23.5%	76.5%	.571	307	16.3%	83.7%	.442
	それ以外	174	26.4%	73.6%		522	18.4%	81.6%	
	父親または母親が小・中・高校い ずれかで民間・地域クラブ経験あり	72	20.8%	79.2%	.319	207	14.5%	85.5%	.174
	それ以外	217	26.7%	73.3%		622	18.6%	81.4%	
スポーツ系の 習いごと	スポーツ系の習いごとをしている	93	20.4%	79.6%	.193	486	12.8%	87.2%	.000
	スポーツ系の習いごとをしていない	196	27.6%	72.4%		345	24.6%	75.4%	
家族での 運動・スポーツ	家族と一緒に運動・スポーツを行う	202	20.8%	79.2%	.008	514	13.4%	86.6%	.000
	家族と一緒に運動・スポーツを行わない	87	35.6%	64.4%		316	24.7%	75.3%	
家族が子どもの スポーツ活動を みにいく	家族が子どものスポーツ活動をみにいく	103	20.4%	79.6%	.135	476	13.0%	87.0%	.000
	家族が子どものスポーツ活動をみにいかない	183	28.4%	71.6%		350	23.4%	76.6%	

注1) 運動・スポーツ:運動あそびも含む

注2) は調整済み残差>1.96、 は<-1.96のセル

注3) 母子家庭:父親が単身赴任等のため同居していない場合も含む

注4) スポーツ系の習いごと:水泳(スイミング)、サッカー、バレエ、体操、剣道、柔道、野球、空手、テニス、ゴルフ、バスケットボール、バレーボール、陸上競技、合気道、エアロビクスダンス、キックベース、筋力トレーニング、車いすテニス、車椅子バスケットボール、少林寺拳法、拳法、ジャズダンス、新体操、スキー、相撲、ソフトバレー、ソフトボール、ソルフェージュ、体育クラブ、スポーツ教室、タグラグビー、卓球、ダブルダッチ、ダンス、テコンドー、ドッジボール、トランポリン、なぎなた、バドミントン、ハンドボール、ヒップホップダンス、フォークダンス、フットサル、フラダンス、ポートボール、ボクシング、ボクササイズ、マラソン、リトミック、レスリング

資料: 笹川スポーツ財団「4~9歳のスポーツライフに関する調査」2015

表B-2に運動・スポーツ実施頻度を従属変数としたロジスティック回帰分析（強制投入法）の結果を示した。未就学児では回帰式（モデル係数のオムニバス検定）が有意ではなく、モデルのあてはまり（NagelkerkeのR²乗）も良くなかった。小学生では回帰式は有意であったが、やはりモデルのあてはまりはあまり良くなく、家族構成や世帯年収、父母の運動・スポーツ実施状況、保護者の運動・スポーツ活動歴などの要因は、子どもの運動・スポーツ実施頻度との間に有意な関係はみられなかった。一方で「スポーツ系の習いごとをしている」と「家族と一緒に運動・スポーツを行う」が、子どもの運動・スポーツ

実施頻度との間に有意な正の相関がみられた。前述のとおり、文部科学省による「平成27（2015）年度全国体力・運動能力、運動習慣等調査」でも「家の人といっしょに運動やスポーツをしている」という子どもほど、運動能力が高いとされており、上記の結果はこれとも一致する。また、小学生でのみスポーツ系の習いごとと運動・スポーツ実施頻度との間に有意な正の関数がみられたのは、未就学児では実施している種目が「運動あそび」が中心であるのに対し、小学生では「運動・スポーツ」の種目が多くなる状況が影響していると考えられる。

【表B-2】子どもの運動・スポーツ実施頻度を従属変数としたロジスティック回帰分析

	未就学児				小学生			
	有意確率	オッズ比	オッズ比の95%信頼区間		有意確率	オッズ比	オッズ比の95%信頼区間	
			下限	上限			下限	上限
モデル係数のオムニバス検定	.208				.000			
Nagelkerke R ² 乗	.067				.072			
Hosmer と Lemeshow の検定	.088				.537			
性別(女子=0、男子=1)	.895	.963	.548	1.690	.435	1.165	.794	1.709
家族構成(二世帯=0、三世帯以上=1)	.995	.998	.488	2.039	.321	.796	.506	1.250
母子家庭(母子家庭=1)	.386	1.626	.542	4.881	.728	1.138	.550	2.352
父親の運動・スポーツ実施状況(している=1)	.519	1.228	.657	2.295	.251	.783	.515	1.189
母親の運動・スポーツ実施状況(している=1)	.105	.566	.284	1.127	.467	1.190	.745	1.903
父親または母親の中学・高校での運動部活動経験(あり=1)	.510	1.215	.680	2.170	.976	1.006	.676	1.497
父親または母親の小・中・高校での民間・地域クラブ経験(あり=1)	.533	1.237	.634	2.415	.586	1.135	.720	1.787
スポーツ系の習いごと(している=1)	.265	1.369	.788	2.379	.018	1.464	1.069	2.006
家族と一緒に運動・スポーツを行う(行う=1)	.008	2.351	1.250	4.423	.003	1.887	1.250	2.847
家族が子どものスポーツ活動をみにいく(みにいく=1)	.753	1.118	.559	2.233	.245	1.312	.830	2.073

注1) 運動・スポーツ:運動あそびも含む

注2) 有意水準:p<0.1

注3) 「世帯収入」は回答率が低く、分析に用いられるサンプルが著しく減ってしまうと、クロス集計で有意な相関がみられなかったことからロジスティック回帰分析からは除外した

注4) 「保護者の運動・スポーツ歴」は、回答者が母親か父親であった場合のみ、中学高校で一貫して運動部だったケースと、小中高校で民間地域クラブに所属していたケースをダミー変数として用いた。特に、前者は運動部活動経験者が非常に多いため、いわゆる運動部活動をより長く経験したサンプルに絞って、運動部経験の影響をみた。大学時代における経験については、学歴効果が反映されると考えられるため、分析から除外した。

資料: 笹川スポーツ財団「4～9歳のスポーツライフに関する調査」2015

B-3 家族と一緒に運動・スポーツを行う要因

以上のように、運動・スポーツ実施頻度を従属変数にした分析では、未就学児・小学生のいずれも「家族と一緒に運動・スポーツを行う」との間に有意な正の関係がみられた。

それでは、家族での運動・スポーツ活動は、どのような条件によって説明できるだろうか。「家族と一緒に運動・スポーツを行う」を従属変数としたロジスティック回帰分析の結果を表B-3に示した。モデルの適合度

(オムニバス検定)も有意であり、モデルのあてはまり(NagelkerkeのR²乗)も比較的良く、未就学児、小学生とも「男子」、「父親、母親が運動・スポーツを実施している」、「家族が子どものスポーツ活動をみにいく」者ほど、家族と一緒に運動・スポーツを行っていた。また、小学生では「母子家庭」が有意な負の影響を、「父親または母親が中学・高校で運動部活動経験あり」が正の影響を与えていた。

【表B-3】 家族との運動・スポーツ実施を従属変数としたロジスティック回帰分析

	未就学児				小学生			
	有意確率	オッズ比	オッズ比の95%信頼区間 下限 上限		有意確率	オッズ比	オッズ比の95%信頼区間 下限 上限	
モデル係数のオムニバス検定	.000				.000			
Nagelkerke R ² 乗	.258				.257			
Hosmer と Lemeshow の検定	.767				.370			
性別(女子=0、男子=1)	.005	2.276	1.278	4.053	.001	1.722	1.246	2.380
家族構成(二世帯=0、三世帯以上=1)	.408	1.387	.638	3.015	.868	1.035	.690	1.553
母子家庭(母子家庭=1)	.120	.460	.173	1.224	.013	.455	.243	.849
父親の運動・スポーツ実施状況(している=1)	.000	3.746	1.904	7.368	.000	2.900	2.041	4.121
母親の運動・スポーツ実施状況(している=1)	.001	4.904	1.973	12.192	.000	3.848	2.533	5.846
父親または母親の中学・高校での運動部活動経験(あり=1)	.532	.827	.457	1.499	.000	2.013	1.438	2.816
父親または母親の小・中・高校での民間・地域クラブ経験(あり=1)	.263	1.488	.742	2.981	.881	1.029	.708	1.496
スポーツ系の習いごと(している=1)	.162	.685	.403	1.165	.793	.969	.763	1.229
家族が子どものスポーツ活動をみにいく(みにいく=1)	.065	2.034	.956	4.325	.008	1.683	1.149	2.466

注1) 運動・スポーツ:運動あそびも含む

注2) 家族との運動・スポーツ実施:「家族と一緒に運動・スポーツを行う」の変数を用いた

注3) 有意水準:p<0.1

資料: 笹川スポーツ財団「4~9歳のスポーツライフに関する調査」2015

B-4 運動・スポーツ・運動あそびの好き嫌いとう家族

運動・スポーツ・運動あそびの好き嫌いを従属変数としたロジスティック回帰分析の結果を表B-4に示した。未就学児では少し解釈の難しい変数が有意となっているが、小学生では運動・スポーツ実施高頻度群、スポーツ系の習いごとをしている、家族と一緒に運動・スポーツを行う、家族が子どものスポーツ活動をみにいく、といった変数が子どもの運動・スポーツ・運動あそびに対する好感度に有意な正の影響を与えていた。特に、小学生では

「家族が子どものスポーツ活動をみにいく」が「スポーツ系の習いごとをしている」や「家族と一緒に運動・スポーツを行う」とは独立して子どもの運動・スポーツ、運動あそび好きに影響している点は興味深い。つまり、単に子どもにスポーツ系の習いごとをさせる、あるいはクラブに加入させるだけではなく、親がみに来てくれるといった保護者の積極的な関与が子どもの運動・スポーツ、運動あそびへの好感度を高めているようである。

【表B-4】 運動・スポーツの好き嫌いを従属変数としたロジスティック回帰分析

	未就学児				小学生			
	有意確率	オッズ比	オッズ比の95%信頼区間		有意確率	オッズ比	オッズ比の95%信頼区間	
			下限	上限			下限	上限
モデル係数のオムニバス検定	.010				.000			
Nagelkerke R ² 乗	.122				.117			
Hosmer と Lemeshow の検定	.167				.509			
性別(女子=0、男子=1)	.871	.954	.542	1.681	.295	1.187	.861	1.634
家族構成(二世帯=0、三世帯以上=1)	.565	1.242	.594	2.600	.689	1.085	.726	1.622
母子家庭(母子家庭=1)	.032	4.114	1.130	14.980	.511	1.228	.665	2.266
父親の運動・スポーツ実施状況(している=1)	.006	2.438	1.286	4.622	.101	1.343	.944	1.911
母親の運動・スポーツ実施状況(している=1)	.302	.688	.337	1.401	.152	1.330	.900	1.967
父親または母親の中学・高校での運動部活動経験(あり=1)	.737	1.105	.616	1.982	.895	1.023	.733	1.426
父親または母親の小・中・高校での民間・地域クラブ経験(あり=1)	.092	1.830	.907	3.690	.620	1.100	.755	1.603
運動・スポーツ実施頻度	.739	1.112	.595	2.080	.052	1.484	.996	2.211
スポーツ系の習いごと(している=1)	.184	1.634	.792	3.371	.088	1.411	.951	2.093
家族と一緒に運動・スポーツを行う(行う=1)	.077	1.781	.940	3.376	.001	1.801	1.276	2.542
家族が子どものスポーツ活動をみにいく(みにいく=1)	.897	.955	.474	1.924	.030	1.549	1.043	2.303

注1) 運動・スポーツ:運動あそびも含む

注2) 「好き」+「どちらかというと好き」=1、「どちらかというと嫌い」+「嫌い」=0

注3) 有意水準:p<0.1

資料: 笹川スポーツ財団「4~9歳のスポーツライフに関する調査」2015

B-5 まとめと課題

以上の結果、家族構成（二世帯か三世帯以上か、母子家庭か）や世帯収入、保護者の運動・スポーツ実施状況、保護者の運動・スポーツ経験などの家族要因と、子どもの運動・スポーツ実施頻度との間には有意な関係はみられなかったが、一方で家族での運動・スポーツ実施との間には有意な正の関係がみられた。また、小学生でのみスポーツ系の習いごとの実施との間に有意な正の関係がみられた。さらに、家族と一緒に運動・スポーツ、運動あそびを行うかどうかは、「母子家庭ではない」（小学生のみ）、「父親、母親が運動・スポーツを実施している」、「父親または母親が中学・高校で運動部活動経験あり」（小学生のみ）、「家族が子どものスポーツ活動をみに行く」といった家族要因と関係していた。

前述のとおり、吉田ら（2004）や文部科学省（2015）の調査では、家族との運動・スポーツ実施と子どもの高い運動能力との関連性を報告している。本稿では「運動・スポーツ実施頻度」を従属変数としていくつかの要因との関連性について分析を行った結果、未就学児では相関関係はあまり高くはなかった。未就学児は「運動あそび」の種目の実施が中心となるため、全体的に実施頻度が高い。運動・スポーツ実施頻度自体は子どもの体力・運動能力とあまり関係しないが、大人が子どもと一緒にあそぶ活動は子どもの運動の質に影響を与え、体力・運動能力を向上させているという仮説を立てることができるかもしれない。小学生になると、「運動あそび」の実施が減り「運動・スポーツ」の種目が中心となるため、家族での運動・スポーツ実施に加えて、スポーツ系の習いごとをしているかどうかが子どもの運動・スポーツの量を確保するうえでも重要な要素になり、体力・運動能力にも影響を与えるようになって考えられる。

このように、家族が子どもと一緒に運動・スポーツ、運動あそびを行うには、家族構成や保護者の運動・スポーツ実施状況、保護者の運動部活動の経験といった家族要因が関係しており、運動・スポーツの実施頻度のほか、体力・運動能力にも間接的に影響を与えているかもしれない。

また、運動・スポーツの好き嫌いを従属変数とする分析では、特に小学生低学年では、スポーツ・運動実施頻度やスポーツ系の習いごとの実施、家族との運動・スポーツ活動とともに、家族が試合や練習をみにいくかどうかにも有意な影響を与えており、家族の直接的なコミットメントが重要な要素であると思われる。一方で、家族のコミットメントが難しい状況の子どもに対し、どのようなフォローやアプローチが必要かを考えなければならない。

最後に本稿では、運動・スポーツ・運動あそびの実施頻度を従属変数として分析を行ったが「運動・スポーツ・運動あそび」といってもその活動は多様であるため、モデルの予測精度は低くなってしまったかもしれない。たとえば、種目や実施頻度、実施強度などによってもう少し限定的・具体的に定義した従属変数を用いて、子どもの運動・スポーツ活動に対する家族の影響をみていく必要があるものと思われる。

また、海老原ら（1989）によれば、特に親から子どもへの影響は「父親—息子」「父親—娘」「母親—息子」「母親—娘」といった親子間の性の組み合わせ（sex-stereotyping）によって異なると報告している。本稿でも「家族と一緒に運動・スポーツを行う」は男子で有意に高くなっているが、関わる保護者の組み合わせを考慮した分析が今後さらに必要かもしれない。

<参考文献>

海老原修・横山文人・宮下光正：スポーツ的社会化における相互的影響の検証，横浜国立大学人文紀要 第一類，哲学・社会科学35，99-110，1989

加賀秀夫：子どもを丈夫に育てる重要な他者—親と教師の役割—，体育の科学45（5），363-367，1995

文部科学省：平成27年度全国体力・運動能力、運動習慣等調査集計結果，2015
(http://www.mext.go.jp/a_menu/sports/kodomo/zencyo/1364874.htm)

吉田伊津美：親と子のスポーツ心理学，体育の科学 59(5)，324-327，2009

吉田伊津美・杉原隆・森 司朗：家庭環境が幼児の運動能力発達に与える影響，体育の科学 54(3)，243-249，2004